

2025 年度腐食防食学会 受賞者選定経過報告

表彰選考委員会
委員長 渡邊 豊

本会では、腐食防食の分野における学術および技術の進歩発展に顕著な貢献をした会員に対して学会賞、腐食防食の分野における学術の進歩発展に顕著な功績をあげている者を講師として、会員の知識と興味を高める権威ある講演とする岡本剛記念講演賞、腐食防食の分野における学術の進歩発展に功労のある会員に対して学術功労賞、腐食防食の分野における技術の進歩発展に功労のある会員に対して技術功労賞、優秀な学術論文に対して論文賞、優れた技術に対して技術賞、優秀な若手の会員に対して進歩賞、加えて本部ならびに支部の事業発展に貢献した会員に対して功績賞、貢献賞を贈り表彰してきている。2025 年度で、学会賞は第 28 回(含む協会賞)、岡本剛記念講演賞は第 29 回、学術功労賞および技術功労賞はそれぞれ第 10 回、論文賞と技術賞は第 46 回、進歩賞は第 39 回となる。また、昨年度より若手優秀論文賞を新設し、若手研究者或いは若手技術者が著作した優秀な論文に対して表彰を行うこととした。

本会の規程に従い、表彰選考委員会内に、学会賞選考委員会(委員長 渡邊 豊)、岡本剛記念講演賞選考委員会(委員長 安住和久)、学術功労賞選考委員会(委員長 加藤千明)、技術功労賞選考委員会(委員長 南谷林太郎)、論文賞選考委員会(委員長 春名 匠)、若手優秀論文賞選考委員会(委員長 板垣昌幸)、技術賞選考委員会(委員長 細谷敬三)、進歩賞選考委員会(委員長 片山英樹)を設け、2024 年 12 月から 2025 年 1 月にわたって慎重に審査を行ってきた。その結果、推薦された候補者から、学会賞 1 名、岡本剛記念講演賞 1 名、学術功労賞 1 名、技術功労賞 1 名、論文賞 2 件、若手優秀論文賞 1 名、技術賞 3 件、進歩賞 2 名が選考された。

<学会賞>

電力流通設備の腐食防食技術の開発・普及および学会運営への貢献

市場幹之(東京電力ホールディングス株式会社)



市場幹之

【略歴】

市場幹之君は昭和 59 年早稲田大学理工学部金属工学科を卒業、昭和 61 年同理工学研究科修士課程を修了後、同年日本鋼管株式会社中央研究所に入社。平成 5 年 NKK 総合材料研究所、平成 15 年 JFE スチール株式会社スチール研究所、平成 16 年東京電力株式会社技術開発研究所に入社、平成 19 年同スペシャリスト、平成 30 年同首席研究員で現在に至る。この間、鉄鋼材料の開発・ソリューション、および電力設備の経年劣化対策の研究に従事。平成 28 年早稲田大学で博士(工学)取得。

本会では平成 26 年、令和 3 年、令和 7 年技術賞、平成 28 年技術功労賞を受賞。技術委員長、理事、副会長を歴任。現在、監事、腐食センター副センター長。

【選考理由】

市場幹之君は NKK、東京電力在籍の約 40 年間、当学会正会員として防食技術の開発と普及ならびに学会運営の両面で顕著な貢献をした。

配電機材小委員会ならびに建設小委員会の委員長として、配電を中心とする電力流通分野設備の防食に果たした役割は大きく、10 電力を組織した長期協同試験や腐食を専門としない電力委員への啓蒙を推進した。PC 鋼材の水素脆化試験法の学会規格化及び送電鉄塔塗料の実用化に尽力し、学会規格の公的電力規格への採用や設備保全の高度化を通じて公衆安全の向上に寄与した。腐食防食学会を代表して電気学会の各種調査専門委員会や無電柱化の委員会に参画して重要な役割を果たした。これら一連の技術的貢献により、当学会の技術賞や技術功労賞を受賞した他、当学会

以外でも、科学技術賞(スガウェザリング技術振興財団)や電力分野の電気科学技術奨励賞(電気科学技術奨励会)を受賞するなどして、当学会の地位を向上させた。

学会の運営面では、庶務理事、技術委員長、副会長を歴任した。また、腐食センター担当理事及び同幹事として、コロナ禍で停滞した腐食センターの財政や運営を大きく改善し、学会運営に貢献した。

これら学術・技術及び学会運営への貢献は顕著であり、市場氏は学会賞受賞に相応しいと認めるものである。

岡本剛記念講演

表面処理鋼を含めた鉄鋼材料の腐食研究

野田和彦(芝浦工業大学)



野田和彦

【略歴】

野田和彦君は平成4年3月東京工業大学大学院理工学研究科金属工学専攻博士課程修了、博士(工学)取得。北海道大学、東京工業大学、金属材料技術研究所(物質・材料研究機構)、電力中央研究所に勤務後、平成17年4月芝浦工業大学工学部に入職。平成21年より教授、現在に至る。この間、腐食防食、表面処理、電気化学、金属工学関係の教育・研究に従事。

本会(腐食防食協会)では、長年の編集委員、多回数の材料と環境実行委員に加え、研究専門委員会委員長、関東支部支部長、材料と環境実行委員長、理事を歴任。平成8年進歩賞、平成29年学術功労賞を受賞。

【選考理由】

野田和彦君は鉄、低合金鋼、亜鉛めっき鋼板などの表面処理鋼材、ステンレス鋼などの鉄鋼材料の腐食防食において、主に電気化学測定からアプローチした研究を実施し、数々の業績を上げられている。主たる論文は100編を超え、「材料と環境」誌にも多数掲載されている。

また、学会活動においては、理事、研究専門委員長および講演大会実行委員長を歴任され、学術的にも非常に優れた業績を挙げており、岡本剛記念講演賞としてふさわしいので、ここに推薦する。

<学術功労賞>

生体用Mg合金のアパタイト被膜の開発

廣本祥子(国立研究開発法人物質・材料研究機構)



廣本祥子

【略歴】

廣本祥子君は平成9年3月早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了後、同年4月科学技術庁金属材料技術研究

所に入所。平成13年国立研究所独立行政法人化に伴い、(独)物質・材料研究機構に転属、平成17年4月主任研究員、平成21年4月主幹研究員、令和3年4月グループリーダー、現在に至る。その間、平成14年6月博士(工学)(北海道大学)を取得し、平成15-16年スイス連邦工科大学ローザンヌ訪問研究員、平成31年より早稲田大学理工学部客員教授、令和2-7年東北大学金属材料研究所客員教授。本会では、編集委員、出版委員、コロージョンセミナー委員、理事2回などを歴任し、平成17年優秀講演賞、平成21年進歩賞受賞。

【選考理由】

廣本祥子君の学術的な進歩発展への貢献に関しては、腐食防食に関わる一流学術雑誌に主著として17編の論文掲載(共著を含めると30編)があり、いずれも多数の被引用数がある。これらの業績は腐食防食に関する学術的な進歩発展に対する大きな貢献である。また、本学会の会誌「材料と環境」にも3編の解説記事、1編の論文掲載がある。

また、出版委員を長年担当しており、今年度からは委員長を担当している。その他にもZairyō-to-Kankyo編集委員、コロージョンセミナー、コンペティション審査委員長も歴任しており、本学会の理事も歴任していることから本学会に対する学術的組織的な貢献度も大きい。

学術的および技術的な具体的業績としては、生体内溶解材料として期待されるMg合金の腐食制御および骨形成促進に係わる機構解明に対する貢献である。選考者は生体用金属材料の腐食防食の研究開発を通じて水酸アパタイトおよび炭酸アパタイトの被覆法を開発した。その生体内での腐食特性や細胞との相互作用に関する知見は、これまで困難とされた生体用Mg合金の実用化を大きく推進した。この独創的なアパタイト被膜開発により、生体内での溶解・吸収可能な人工骨の開発に結びつけた卓越した業績は高く評価出来るものである。

＜技術功労賞＞

塗料による防食技術の開発と啓蒙、学会運営への積極的参加

松田英樹(関西ペイント株式会社)



松田英樹

【略歴】

松田英樹君は平成6年3月立教大学理学部卒業。同年4月関西ペイント株式会社入社。工業塗料本部技術部へ配属。その後、技術開発本部、R&D本部にて工業用・汎用防食塗料全般の開発及び塗装鋼材の腐食防食機構等の研究開発、汎用塗料本部にて防食塗料の設計・涉外業務に従事。平成29年9月広島大学大学院にて博士(工学)取得。令和元年4月より同社研究開発部門・技術開発本部にて特級研究員に着任し、現在に至る。平成27年5月技術賞、平成31年2月より令和2年2月及び令和6年2月より令和8年2月(予定)まで本会庶務理事。

【選考理由】

松田英樹君は塗料分野で当学会を含めて顕著な功績を残している。塗料による防食技術課題に対して、独自の解決方法により対策を講じ、その技術を世に広めたことは非常に評価される。技術的進歩・発展に顕著な功労があると認められるため、技術功労賞の授与に値すると判断した。

<論文賞①>

全表面観察によるステンレス鋼におけるピット起点となる非金属介在物の統計的解析

材料と環境, 71巻2号 46頁~56頁
江口健一郎(JFEスチール株式会社)



江口健一郎

【略歴】 江口健一郎君は平成18年3月九州大学大学院物質科学工学科を修了後、同年4月、JFEスチール株式会社入社。スチール研究所へ配属され、主に油井管やラインパイプに関する腐食の研究や新材料の開発に従事し、現在に至る。この間、平成28年10月から平成30年10月までマンチェスター大学に在学。令和3年1月に同大学にて博士号(PhD, Corrosion and Protection)を取得。本会では令和5年より会誌「材料と環境」編集委員。

【選考理由】

本論文では、材料表面を自動的かつ広範囲に観察・分析する装置を駆使して多数個の非金属介在物の種別とサイズを分析したステンレス鋼に対して孔食試験が行われ、非金属介在物の各特性が孔食の発生・成長に及ぼす影響を統計的・定量的に評価されている。さらに孔食発生に及ぼす表面電位や局部ひずみの影響も考慮された孔食発生機構についても述べられている。このように、非金属介在物を起点とする孔食現象の特徴を統計的に解析した結果に基づいて導出された孔食発生・成長機構は信頼性が高く、局部腐食の理解の深化に繋がる学術的に価値の高いものと判断した。

以上の理由により、本論文を論文賞候補論文に選考した。

<論文賞②>

環境試験による塗膜のアドミタンスと内部構造の変化

材料と環境, 72巻9号 243頁~248頁
堀江俊男(株式会社豊田中央研究所) 北原 学(株式会社豊田中央研究所)
谷 宗親(トヨタ自動車株式会社) 浅井幹雄(トヨタ自動車株式会社)



堀江俊男



北原 学



谷 宗親



浅井幹雄

【略歴】

堀江俊男君は昭和62年北海道大学大学院金属工学専攻修士課程修了後、同年株式会社豊田中央研究所に入社。主として、鋳造用金属材料および、その表面処理技術の開発、塗装鋼板の劣化評価技術の構築に従事し、現在に至る。

北原 学君は平成17年東北大学大学院環境科学研究科修士課程修了、同年株式会社豊田中央研究所入社。主として耐食表面処理、超ハイテン鋼板の遅れ破壊評価および金属・樹脂材料の劣化評価技術の構築に従事。平成31年大阪大学にて博士(工学)取得。令和2年本会進歩賞を受賞。材料の非破壊計測・診断に関する研究に従事し、現在に至る。

谷 宗親君は平成18年3月九州大学大学院総合理工学府修士課程修了後、平成20年11月トヨタ自動車株式会社

に入社。金属材料・防錆に関する研究・開発等に従事し、現在に至る。

浅井幹雄君は平成3年3月名古屋大学大学院工学研究科化学工学博士前期課程修了後、同年4月トヨタ自動車株式会社に入社。材料技術部に配属され塗料・防錆に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

【選考理由】

本論文では、模擬融雪塩を付着させた塗装鋼板を高温高湿過程と極低温過程が繰り返される環境に暴露し、その際の塗膜劣化過程を電気化学インピーダンス測定、塗膜中の水分量分析、高分子構造解析ならびに塗膜内元素分析により多角的かつ詳細に検討されている。塗膜中に侵入する水分ならびに元素の状態が塗膜のアドミタンス変化に反映される可能性を見出した点は、塗装鋼板の塗膜劣化過程の会笑みに繋がり学術的に優れているだけでなく、塗膜劣化診断への展開も期待され、工学的に価値が高いと判断した。以上の理由により、本論文を論文賞候補論文に選考した。

＜若手優秀論文賞＞

銅管に含まれるリンが粒界型応力腐食割れに及ぼす影響

材料と環境、72巻3号85頁～92頁
中島孝仁(パナソニック株式会社)



中島孝仁

【略歴】

中島孝仁君は平成24年3月京都大学大学院エネルギー科学研究所エネルギー応用科学専攻修士課程修了後、同年4月パナソニック株式会社に入社。アプライアンス社技術本部に配属され、令和4年10月に空調機器イノベーションセンターへ異動。この間、家電製品の腐食損傷解析や、空調機器の冷媒配管および熱交換器の腐食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。令和6年5月京都大学にて博士(工学)取得。

【選考理由】

本論文は非常に複雑な銅のSCCに対して正確な実験結果に基づく理論的考察を行っており、優れた論文と評価できる。アンモニア含有環境における銅管の腐食劣化は社会的にも深刻な課題であり、本論文の重要性は高い。本論文では、腐食メカニズムを示すのみならず、得られた知見をもとに銅管SCCの抑止法が提案されており、論文として高度であると共に学術面および技術面両方での貢献が大きい。以上の理由から、本論文は研究論文としての完成度が高く、若手優秀論文賞に値するものと選考した。

<技術賞①>

アニオン交換処理水を用いた建築設備機器・配管の腐食対策技術

松川安樹、山田育弘、中村勇二、有坂宏毅、坂口 健、松元美里(新菱冷熱工業株式会社)



松川安樹



山田育弘



中村勇二



有坂宏毅



坂口 健



松元美里

【略歴】

松川安樹君は平成 7 年 3 月武藏工業大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了後、同年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社。建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。平成 22 年 6 月博士(工学、横浜国立大学)、令和 5 年 4 月技術士(上下水道部門)。本会では、会計担当理事(令和元年～令和 3 年)、研究事業委員長(令和 6 年～)を歴任。

山田育弘君は平成 12 年 3 月長岡技術科学大学大学院環境システム工学専攻修士課程修了後、同年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社。令和元年より建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

中村勇二君は平成 27 年 3 月工学院大学大学院工学研究科化学応用学専攻修士課程修了後、同年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社。建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。令和 6 年 9 月博士(工学、横浜国立大学)。

有坂宏毅君は平成 23 年 3 月東北大学工学部材料科学総合学科卒業。平成 29 年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社し、建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

坂口 健君は令和元年 3 月横浜国立大学大学院工学府機能発現工学専攻修士課程修了後、同年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社。建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

松元美里君は令和 2 年 3 月佐賀大学大学院農学研究科生物資源科学専攻修士課程修了後、同年 4 月新菱冷熱工業株式会社に入社。2024 年より建築設備機器・配管の腐食防食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

【選考理由】

過去の学会における研究成果である淡水環境での炭素鋼の防食メカニズムに関する知見を、建築設備機器および配管の防食システムに仕上げ、社会実装した。公共性の高い大学病院や展示場などにも採用されている。

現場に導入されない要因を分析して、運転時はもちろんのこと、腐食問題の起きやすい初期の水張、フラッシング、引き渡しまでのガイドライン案まで作成した。それにより、施工起因の腐食要因を未然に防ぎ、その後も安定した防食効果が發揮できるシステムに仕上げた。今後、本防食システムが建築設備に幅広く普及することを期待する。

<技術賞②>

温度補償型水素モニタリングシステムの開発

大塚真司(JFE スチール株式会社) 秦謙太郎(JFE スチール株式会社) 大田浩史(JFE スチール株式会社)
高木周作(JFE スチール株式会社) 多田英司(東京科学大学)



大塚真司



秦 謙太郎



大田浩史



高木周作



多田英司

【略歴】

大塚真司君は平成 13 年 3 月大阪大学大学院工学研究科修士課程修了後、同年 4 月日本钢管株式会社に入社し、総合材料技術研究所へ配属。平成 15 年 4 月 JFE スチール株式会社となり、スチール研究所に配属。JFE スチール株式会社移行後のスチール研究所において、自動車分野を中心とする表面処理鋼板の材料開発や腐食評価技術開発に従事し、現在に至る。この間令和 2 年 3 月東京工業大学大学院(物質理工学院材料コース)博士課程後期課程修了。本会では令和 4 年論文賞、令和元年技術賞を受賞。編集委員及び令和 5、6 年度に庶務理事。

秦 謙太郎君は平成 27 年 3 月九州大学大学院物質プロセス工学専攻修士課程修了後、同年 4 月 JFE スチール株式会社に入社し、スチール研究所へ配属。主に自動車用高強度鋼板の水素脆性に関する研究・開発に従事し、現在に至る。令和 6 年 4 月若手優秀論文賞を受賞。

大田浩史君は平成 15 年 3 月大阪工業大学工学部機械工学科を卒業、同年 4 月より機械プラント製造メーカに入社し、製造・資材・設計・開発に従事。平成 24 年 10 月 JFE スチール株式会社に移籍し、スチール研究所において、主に自動車用高強度鋼板に関する研究開発に従事し、現在に至る。

高木周作君は平成 7 年 3 月京都大学大学院工学研究科金属加工学専攻修士課程修了後、同年 4 月川崎製鉄株式会社(現 JFE スチール株式会社)に入社。鉄鋼研究所へ配属され、自動車用薄鋼板開発に関する研究・開発に従事。平成 17 年 3 月大阪大学大学院工学研究科生産科学専攻において博士号(工学)取得。現在に至る。

多田英司君は平成 10 年 3 月東京工業大学大学院理工学研究科金属工学専攻博士後期課程修了後、同年 4 月秋田大学工学資源学部助手、平成 19 年同准教授、平成 23 年東京工業大学大学院理工学研究科准教授を経て、令和 3 年 4 月より東京工業大学物質理工学院・材料系教授、令和 6 年 10 月より東京科学大学物質理工学院・材料系教授、現在に至る。その間オハイオ州立大学博士研究員、ブルゴーニュ大学客員研究員。同君は、本会の編集委員、評議員、理事、コロージョン・セミナー企画委員長、研究専門委員長などを歴任。また、本会では、平成 17 年三澤記念賞、平成 19 年進歩賞、令和 4 年論文賞、令和 6 年学術功労賞、その他では、平成 17 年英國腐食学会 T. P. Hoar Award 2005、令和元年日本鉄鋼協会西山記念賞(学術賞)などを受賞。

【選考理由】

カソードチャージ法水素侵入量測定法を応用して、自動車の実車走行で使える水素モニタリングという独創的な発想をシステムに仕上げ、実車走行環境のその場での水素侵入挙動を把握した。

実車走行で得たデータを使い水素脆化感受性の高い環境条件を明らかにし視覚化しており、更なる高強度自動車用鋼板の開発に対して、鋼材への水素侵入という視点から貢献することが期待される。

<技術賞③>

「溶融亜鉛アルミニウム合金めっき」の配電機材への適用と設備保全への貢献

高林敦史(イワブチ株式会社)

畠野剛志(田中亜鉛鍍金株式会社)

片岡顕比古(東京電力パワーグリッド株式会社)

上地 亮(沖縄電力株式会社)

竹田安輝(北海道電力ネットワーク株式会社)

諸岡俊彦(株式会社興和工業所)

盛永康文(N テック株式会社)

和田孝平(東京電力パワーグリッド株式会社)

中村英一(北海道電力ネットワーク株式会社)

市場幹之(東京電力ホールディングス株式会社)



高林敦史



諸岡俊彦



畠野剛志



盛永康文



片岡顕比古



和田孝平



上地 亮



中村英一



竹田安輝



市場幹之

【略歴】

高林敦史君は平成 7 年 3 月中央大学理工学部卒業、同年イワブチ株式会社入社。製品開発部、生産技術部などを経て配電機材の開発、溶融亜鉛アルミニウム合金めっきの研究開発などに従事。現在、取締役製品開発部長。

諸岡俊彦君は平成 7 年長崎大学大学院工学研究科卒業。同年株式会社興和工業所に入社し、表面処理技術部へ配属。主として、めっきに関わる品質管理、新規技術開発などに従事し、現在は基礎技術研究室室長。

畠野剛志君は平成 7 年 4 月田中亜鉛鍍金株式会社に入社。製造工場、生産技術部、品質保証部などを経て主に溶融亜鉛アルミニウム合金めっきの研究開発と JIS 化に従事。現在、同社堺工場工場長。

盛永康文君は平成元年 4 月那須電機鉄工株式会社入社。技術開発部・生産工場を経て高耐食めっきの研究開発および JIS 規格化に従事。平成 21 年博士(理学、東京理科大学)取得。現在、N テック株式会社代表取締役社長。

片岡顕比古君は平成 19 年 3 月横浜国立大学工学部電気工学科修士課程修了、同年東京電力株式会社神奈川支店入社。配電部、研究所、調達部を経て設備管理、配電機材の分析、開発研究などに従事。現在、神奈川総支社中地域マネージャー。平成 26 年技術賞受賞。

和田孝平君は平成 13 年 3 月東電学園高等部修了、同年東京電力株式会社沼津支店入社、配電部、経営企画室に配属。主に配電設備保全、配電機材の運用、開発研究に従事。現在、配電部チームリーダーとして配電機材全般の技術開発を担当。

上地亮君は平成 3 年 4 月沖縄電力株式会社に入社。本社、八重山支店、那覇支店などの配電部門を経て主に配電の設備保全、機材、システムに関する研究・開発に従事。現在、配電業務グループマネージャー。

中村英一君は昭和 59 年 3 月日本工学院修了、同年北海道電力株式会社道央支店入社、本店配電部、支店配電部長、本店配電部カイゼン担当部長を歴任。主に配電機材開発、配電設備保全に従事。現在、流通カイゼン推進室にて全社カイゼン活動を推進。平成 26 年技術賞受賞。

竹田安輝君は平成 7 年 3 月釧路工業高等専門学校修了、同年北海道電力株式会社旭川支店入社、札幌支店、本店配電部を歴任。主に配電設備保全、配電機材の運用、開発に従事。現在、釧路支店配電グループリーダー。

市場幹之君は昭和 61 年早稲田大学理工学研究科修士課程修了。同年日本鋼管株式会社中央研究所入社。平成 16 年東京電力株式会社技術研究所入社。現、首席研究員。鉄鋼材料と電力設備の腐食防食の研究に従事。早稲田大学で博士(工学)取得。平成 26 年、令和 3 年技術賞、平成 28 年技術功労賞。

【選考理由】

バッチ式溶融亜鉛アルミニウム合金めっきは、亜鉛めっきに比較して耐食性が期待できるが、付着量が少なく製品

毎に組成などが異なる。

当学会の技術委員会配電機材小委員会で架空配電環境において長期評価を行い、本めっきが強塩害環境で亜鉛めっきに対して優位性を示すことを明らかにし、業界での情報共有および標準化を進めた。昨年の技術賞選考委員会のコメント(当学会での公表要件を満たさない)に従い、本年第71回材料と環境討論会の特別セッションにおいて、強塩害環境での溶融亜鉛アルミニウムめっきの耐食性に関する工学的知見および各種技術データを公表した。

配電機材の安全性向上やメンテナンスを考慮した維持コスト削減効果は非常に大きい。

<進歩賞①>

燃料電池および水電解分野における金属セパレータの耐食性に関する研究

箕浦歩夢(JFE テクノリサーチ株式会社)



箕浦歩夢

【略歴】

箕浦歩夢君は令和3年3月岩手大学大学院総合科学研究科理工学専攻修士課程修了後、同年4月JFEテクノリサーチ株式会社に入社し、機能材料ソリューション本部環境耐久性・腐食解析センターに配属され、腐食調査ならびに燃料電池・水電解分野の金属材料に関する耐食性評価の試験受託に従事し、現在に至る。

【選考理由】

箕浦歩夢君はPEFC用ステンレス鋼製セパレータの腐食解析に従事し、従来注目されてきたカソード側よりアノード側における活性溶解がMEA汚染の主因になることを明らかにするなど、注目すべき成果を上げている。また、PEM型水電解用セパレータの腐食解析にも発展しており、これらの成果は本誌および講演大会で報告されている。本会の活動にも貢献しており、今後の腐食・防食分野での活躍が期待される。

<進歩賞②>

ステンレス鋼の局部腐食に及ぼす放射線核種影響と防食技術の研究

青山高士(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構)



青山高士

【略歴】

青山高士君は令和元年3月東北大学大学院知能デバイスマテリアル専攻博士課程修了後、同年4月、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構に入社し、原子力基礎工学研究センター防食材料技術開発グループへ配属され、主に1F廃炉環境における鋼の腐食に関する研究・開発に従事し、現在に至る。

【選考理由】

青山高士君は銅イオンキレート錯体を用いたステンレス鋼すき間腐食抑制技術を開発し、ステンレス鋼の活性溶解抑制メカニズムの解明を行ってきた。近年は、福島第一原発廃炉過程での構造体腐食を想定し、ステンレス鋼腐食への放射線影響として線種(β線)の影響に関する研究を進めている。これらの成果は本誌および講演大会で報告されている。本会の活動にも貢献しており、今後の腐食・防食分野での活躍が期待される。

<功績賞>**【略歴】**

中山佳則君は昭和 58 年 3 月日本大学理工学部工業化学科(現物質応用化学科)を卒業後、同年 4 月三洋電機株式会社に入社、自販機事業部に配属され、主にカップ式自販機及び飲料ディスペンサのステンレス鋼の腐食研究に従事。平成 14 年自販機事業の譲渡に伴い社外出向を経て三洋電機に帰任し、約 7 年のブランクの後、平成 21 年より食品流通業界における冷凍・冷蔵機器の金属材料の防食並びに表面処理業務を行い、平成 24 年のパナソニック転籍から退職まで一貫して腐食防食技術に従事。現在は独立し、防食技術や表面技術支援、技術者倫理の啓蒙などに従事。その間、平成 10 年技術士(金属部門)、平成 23 年に腐食防食専門士を取得、また、平成 28 年に日本技術士会会长表彰を受賞。本会では、研究事業委員長、理事、副会長、監事を歴任。



中山佳則



八代 仁

【略歴】

八代 仁君は昭和 59 年 3 月東北大学大学院工学研究科博士前期課程応用化学専攻修了後、昭和 59 年 4 月岩手大学工学部(現理工学部)に助手として赴任、平成 6 年同助教授、平成 18 年に同教授となり令和 7 年 3 月退職。平成 2~3 年文部省在外研究員(SRI International)、平成 26 年~30 年岩手大学副学長、令和 2~5 年理工学部長を兼任。この間、主にステンレス鋼の局部腐食に関する研究に従事。平成 19~21 年腐食防食協会理事、平成 21~23 年腐食防食協会東北支部長及び会誌「材料と環境」編集委員長、令和 2 年第 67 回材料と環境討論会実行委員長を歴任。令和 2 年岡本剛記念講演賞受賞。

<貢献賞>

箕島 弘二

【略歴】

箕島弘二君は京都大学工学部精密工学科卒業後、京都大学大学院修士課程機械工学専攻及び同博士後期課程機械工学専攻修了、京都大学工学博士。引き続いで、京都大学工学部機械工学科助手、同助教授、京都大学大学院工学研究科機械工学専攻助教授を経て大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻教授、その後阿南工業高等専門学校校長、大阪大学名誉教授、材料強度学、微小材料強度学、環境強度学、複合材料強度学に関する研究・教育に従事。腐食防食学会理事 3 期 6 年、腐食防食学会関西支部幹事を歴任。